

NEWS LETTER

# KYU-UEDAKEJUTAKU

## INFORMATION

八尾市指定文化財 安中新田会所跡  
旧植田家住宅だより

Volume 07

2011年1月発行

コンサートイベント  
エド・パツハⅢ

こどもガイド養成講座2  
おもちつき大会

特集  
「今東光とその時代」



2010年  
10月29日(金)  
開演 19:00 / 前席 18:30  
※事前受付は終了  
※チケットは1,700円(入館料込み)  
※50名(先着順)  
※演奏者 八尾市在住音楽家  
※指揮 藤信(フジノリ)

【TEL:06-6712-2111】  
京都府八尾市本町1-1-1 旧植田家住宅 主ホール  
〒591-0084 八尾市本町1-1-1 旧植田家住宅 主ホール  
TEL:06-6712-2111 FAX:06-6712-2112  
www.kyusei-edo.com

9月25日～10月25日 秋名

京都府八尾市本町1-1-1 旧植田家住宅 主ホール  
TEL:06-6712-2111 FAX:06-6712-2112  
www.kyusei-edo.com

## コンサートイベント

### 「エド・バッハII～江戸とバッハの時代から～」

江戸時代中期。1704年、大和川付け替えが行われた。同時代、西洋では偉大な音楽家バッハらが活躍していた。

今回で2回目となった旧植田家住宅コンサートイベント。旧家に響くチェロとチェンバロの音色が魅力の「エド・バッハ」の詳しい内容は、4・5頁に掲載。

### 安藤 信行(1945-)【八尾市在住】

元大阪フィルハーモニー交響楽団チェリスト。1975年から2004年まで大阪芸術大学非常勤講師、2002年から地元コミュニティ放送FM ちゃおのパーソナリティを務める。八尾市より1995年に文化賞、2008年に芸術文化の振興にて受賞。

表紙写真:安藤信行氏のチェロ

4

コンサートイベント  
**エド・バッハⅡ**  
～江戸とバッハの時代から～  
出演：安藤 信行 氏 (チェロ奏者)



6

こどもガイド養成講座 2

7

すこし昔のくらし体験「おもちつき大会」

8

講座「八尾再発見～文学に見る八尾～」  
**今東光とその時代**  
講師：伊東 健 氏 (今東光を語る会)



10

資料調査の話 ー民具整理の仕事を通してー

11

聞き取り調査

12

なにわの伝統野菜栽培日記

13

植松のまち・ひと

14

新連載!

コラム「落穂拾い - 今東光の薫風 -」



15

今後のお知らせ

# エド・バッハⅡ

## 江戸とバッハの時代から

チェロとチェンバロの音色が

旧家に木魂(こだま)する

『江戸とバッハ』のコンサート。

旧植田家住宅で歴史の音を

体感！



ル曲だったバッハIIグノーの《アヴェ・マリア》から始まった。J.S.バッハ(一六八五〜一七五〇)は一七・一八世紀を生きた作曲家。そのバッハの曲に一九世紀の作曲家C.グノー(一八一八〜一八九三)が新しい旋律を書き足したのがこの曲である。古いものと新しいものが融合するこの曲は、まさに、本コンサートに相応しいものだった。

今回はバッハをはじめとするバロック音楽(註1)を中心に、近代までの曲がそれぞれソロやアンサンブルで演奏された。また、あんなに「こと安藤信行さんの軽快なおしゃべりもコンサートの魅力のひとつで、ユーモアたっぷりの解説にしばしば笑いが起きた。

一曲目が終わると、チェンバロが紹介された。詳しい楽器解説があり、F.クープラン(二六六八〜一七三三)の「刈り入れ」の曲を、奥様の晴子さんがチェンバロで独奏。旧き時代を感じさせるチェンバロの素朴な音色に、その一音一音を逃すまいと聴衆は聴き入った。

静かな秋の夜、旧植田家住宅の建物にチェロとチェンバロの音色が響き渡った。二〇一〇年一〇月二十九日(金)、コンサートイベント「エド・バッハⅡ」が江戸とバッハの時代から」が上演された。演奏は、昨年「エド・バッハ」で好評を博したチェロ奏者・安藤信行さんと奥様の晴子さん。今回もさらに趣向を凝らしたプログラムが展開された。コンサートは、昨年のアンコー

次はA.スカルラッティ(一六六〇〜一七二五)の「チェロ・ソナタ第二番ハ短調」。四楽章から成る、この古い作品は、各楽章が短く楽節が分かりにくいのだが、それを安藤さんはバロックの奏法と解釈で明確に弾き上げた。安藤さんのチェロはモダンであるが、

ヴィブラートを抑えるなど奏法を変えることでバロックの雰囲気醸し出す。また、楽器のエンドピン（註2）を短くし、張力の低いバロック弓に持ち替えて演奏した。

ちなみに今回のプログラムは、演奏された全八曲のうち半分以上が、第二番や第二楽章など「2」で構成されている。「エド・バッハⅡ」へのこだわりのひとつと言えるのだが、続いている曲もバッハの《無伴奏チェロ組曲第二番二短調》、続けて《ガンバとチェンバロのため》のソナタ第二番二短調であった。

バッハの《無伴奏チェロ組曲第二番》は、前奏曲のみを演奏。チェロの独奏からは、大バッハへの敬意と緊張感が伝わった。また、《ガンバとチェンバロのため》のソナタ（註3）では、チェンバロの小さい気味のよい音と優雅なチェロの旋律が交じり合う息の合った演奏がみられ、この瞬間に生み出された音は建物に木魂（こだま）した。古くから存在する建物と音楽が一体となり、約三〇〇年の歴史を甦らせた瞬間である。



バロックの薫りを残しつつ、プログラムは後半へ。チェンバロからピアノへの過渡期の時代、古典派のW.A.モーツァルト（一七五六〜一七九一）《ピアノ・ソナタハ長調》（K.545）と、ベートーヴェン（一七七〇〜一八二七）の《マンドリンとチェンバロのためのソナ

チネハ短調》（WoO.43a）が演奏された。本来はピアノの曲である《ピアノ・ソナタ》を敢えてチェンバロで挑戦。それによりチェンバロの限界、あるいは音楽の洗練の過程が演奏を通して感じられた。一方《マンドリンとチェンバロのため》のソナチネもチェロとチェンバロによって演奏されたが、チェロの人間味あふれる音色とチェンバロの「冷静さ」が作品の陰鬱なムードとよく調和した。

プログラムも残り二曲となり、ここで近代の作曲家マックス・レーガー（一八七三〜一九一六）の《無伴奏チェロ組曲第二番二短調》がチェロの独奏で熱演された。「酔っぱらった状態で弾く」とあらかじめ解説された異質なこの曲は、大きく揺れる拍子

と旋律が特徴。バッハの《無伴奏チェロ組曲》とは全く違った趣を持っている。終始、会場を別の世界へといざなった。

そしてプログラム最後は、再びバロック時代まで遡り、クープレンの《演奏会用小品集》で締めくくられた。ここでしか聴くことのできない、この建物だからこそ聴くことのできる音楽が「エド・バッハ」最大の魅力である。紙面では表現できない空気や音は、ぜひまた、旧植田家住宅で味わっていただきたい（次回開催は未定）。

【註1】一七世紀初頭〜一八世紀中頃の西洋音楽。

バロックは「歪んだ真珠」の意味。

【註2】チェロの底部にある、伸縮式の棒状の部品。

短くすることで音の響きが軽減される。

【註3】ガンバは「脚（足）」を意味するイタリア語。

当時チェロは、脚に挟んで演奏するものであったことから「ヴィオラ・ダ・ガンバ（脚のヴィオラ）」と呼ばれていた（厳密に言えば現在のチェロとは異なる）。



# こどもガイド

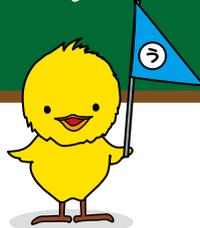
ようせいこどもぎ

## 養成講座②

12月11日(土)

## 2階を案内

しよう



十二月十一日(土)に「こどもガイド養成講座②」が開講されました。今回、八尾や旧植田家に関する歴史を学ぶミニ講義では、「大和川付け替え」をテーマに取り上げました。参加者によって、学校の授業で学習したことの確認や、予習になったと思います。ガイドの説明では、前回は主屋のうち、一階の座敷を案内できるように様々なことを覚えてもらいましたが、今回は「おばあちゃん部屋」や「つし」などがある、主屋の二階部分を取り上げました。和裁のときに使う

へら台や箱まくら、布団の中に入れるコタツなど、少し前までは当たり前に使われていた物も、子供たちにとっては新鮮なようでした。

おまけコーナーの「むかしのくらし体験」では、河内木綿の綿くりと糸つむぎに挑戦してもらいました。何度もやったことのある子もいれば初めての子もいましたが、綿くり機で実綿から種がポロポロ落ちたり、糸車で綿が糸になっていったりするのが面白いようで、時間いっぱいまで楽しんでもらいました。

← まずは歴史の勉強!



「おばあさんの部屋」をガイド

### 参加者のハズ

・階段の所に板みたいなのがあって、二階をかくすのを初めて知れてよかったです。知らないことがいっぱいあったけどいろんなことが知れてよかったです。(四年生 K・S)

・わたをつくるのにやわらかくするのが楽しかったです。でも少しむずかしかったです。(四年生 T・N)

・わたしはこどもガイドをして、旧植田家のことをいっぱい知れました。たねが入っている糸がふわふわになって楽しかったです。三回目もきます。(四年生 B・A)

・糸作りはいい勉強になりました。二階の案内はできるようにもつ勉強したいです。(五年生 N・R)

・わたを作ったそのあとわたを糸にするのがむずかしかったです。そのほかのガイドもおもしろかったです!(五年生 S・D)

・ハンドカーダーがむずかしかったです。(五年生 M・Y)

すしし昔のくらし体験

# おもちつき大会



十二月二十六日(日)は年内最後のイベント「おもちつき大会」でした。朝からカマドに火を入れて、大きな釜でお湯を沸かします。そういえば、今年の行事は雨の日が多かったのですが、この日も朝から雲行きが怪しくて小雨が降っていました。それでも時間になると、土間にはたくさんの方が集まってきました。

さて、もち米が蒸しあがり、おもちつきがスタート。お客さんに熱々のもち米を食べてもらっている間に、こづき(つく



ときにはもち米が飛ばないようにするための作業)をし、まずはスタッフがつき始めます。若いスタッフがダイナミックにつくとお客さんから「おー」という歓声が。続いて、子どもたちがひと回り小さい杵を使って「よいしょ!」。小さな子どもはおかあさんやおとうさんと一緒に。現役高校生もなかなかの健闘。しかし、やはり年季が入ったおじさんたちのつきにはかないません。腰の入れ方が違うのでしょうか?ちなみに私は、的をはずし、

元氣よく石臼をついでしまいました。ガチン。

気を取り直して、今度は手返しに挑戦。お手伝いに来てくださった地元の呉服店・阪口屋さんの絶妙な手返しに憧れ、教えてもらったのですが…。白にへばりついた熱あつのおもちに四苦八苦。手返し道も楽じゃない。来年はもっと上手になります!

一方、ブルーシートが敷かれた部屋では、つきたてのおもちを丸める作業に入っていました。みんなふわふわのあつたかいおもちを片栗粉まみれになりました。丸めたおもちは、きな粉やぜんざいで食べ、その甘くてやわらかいおもちに子どもたちは大絶賛。また、旧植田家住宅で収穫した田辺大根を使った「おろしもち」も、少し辛みがきいていて、大人に大好評でした。こうして、一斗半のもち米もあつという間になくなり、大満足で終わったおもちつき。歳の瀬に旧植田家住宅はとも明るくにぎわいました。

ボランティア・スタッフ

萬田 明花里

## ふれあいとぬくもりの商店街



JR八尾駅前商業協同組合

講座「八尾再発見～文学に見る八尾～」

# 今東光とその時代

2010年11月27日(土) in 旧植田家住宅

講師:伊東 健(今東光を語る会)

今東光は誤解されている。多くの作品の舞

台となった河内地域では、河内を「ケチ」で「スケベエ」で「ガラが悪い」イメージに仕立て上げた張本人として、東光を毛嫌いしている人が多い。誤解を恐れずに言うなら、「毒舌」で「好色」で「ケンカつばやい」生臭坊主というメディアに登場する東光のイメージに惑わされ、本当の姿が見えていないように思えてならない。本当の東光は誠実な人物であるに違いない。なぜなら、彼の身の回りには常にたくさんの方があふれているからだ。

今回の講座は今東光とその周辺にいる数多

くの人びとのかかわりを中心に進められた。伊東氏は東光の人生に三度の青春期があったとし、東光が二十歳ごろの時期を第一の青春期、五十代に入り、天台院に移住してからを第二の青春期、直木賞を受賞してからを第三の青春期とした。

伊東氏によれば、その第一の青春期に東光は二人の画家に出会っている。一人目は、二十歳で天逝した関根正二である。画家を目指した東光は、この若き天才と出会ったこと



で、小説家に転向したのだという。もう一人は、秦テルフである。労働者や娼婦を題材に、暗く、退廃的な作品を描いた秦は、東光がその作品の中で「エロス」を描ききっかけになったそう。言うまでもないが、ここでいうエロスとは下世話な「エロ」ではない。その後、東光は佐藤春夫や谷崎潤一郎、菊池寛などと出会い、文壇に上がっていった。様々な事情から、既成文壇の権威となっていた菊池寛とは袂を分かち、独自の文学活動を続けた東光に最も影響を与えたのが芥川龍之介の自殺であったことは想像に難くない。



芥川が自殺したことが、東光を出家の道へと進ませたようだ。

「文学というものは芥川のような学識がある人物でも続けられないのか」というところから始まり、人生の転換として、昭和五年（一九三〇）に東光は出家した。

天台宗の僧侶となった東光は昭和二六年（一九五一年）に八尾市中野（現西山本町）にある天台院の特命住職となった。このころすでに五十歳を過ぎていた東光の、第二の青春の始まりである。ここで東光が深く交わったのは、以前の東光を知らない人たちだったという。『悪名』の主人公、朝吉のモデルになった岩田浅吉氏との出会いもこのころである。

『お吟さま』で直木賞を受賞した昭和三二年（一九五七）以降が第三の青春期にあたる。この時期で特筆すべきは、司馬遼太郎を発掘したことであろう。現代の若い人たちの間で、今東光の名を知らないということは残念ながらめずらしいことではない。しかし、司馬遼太郎の名は教科書にも出てくるし、知らない人はめつたにいない。ふたまわりも年下の新聞記者だった司馬は、そもそも東光に文章を書かせる側の人間だったのだ。その司馬



の才能を見抜き、直木賞作家に押し上げたのが他ならぬ東光だったのである。

伊東氏は「（今東光を語る際には）作品の中にある『エロス』や『通俗』の奥にあるものを考えていく必要がある、それは（東光と他の）人のかかわりの中で浮かび上がってくる」という。つまるところ、東光は「偽悪者」であり、その根底には深い愛があるということだろう。

柴田錬三郎・谷崎潤一郎・佐藤春夫・川端康成・芥川龍之介・菊池寛・阪東妻三郎・東郷青児・山田耕稼・司馬遼太郎・鴨居羊子・松本清張・瀬戸内寂聴・・・そうそうたる顔ぶれだ。確かに、人柄が悪ければここまで人が集るはずがない。

「人生で一番大切なものは、正直であり、誠実であり、愛情である」

これはマザー・テレサの言葉ではない。今東光の言葉である。

安中新田会所跡 旧植田家住宅  
学芸員 宮元正博

# 旧植田家住宅

## 資料調査の話



### ◆民具整理の仕事を通して

「植田家の土蔵は宝の山だー」そんな風に思うようになるまで時間は掛からなかった。見渡す限りモノ、モノ、モノ。公開されている展示物だけでも相当な種類だというのに、土蔵に収蔵された未整理の民具たちは所狭しと積み置かれている。

私は大学で民俗学を学んでいたが、一年程前、旧植田家住宅の民具を調査・整理するアルバイトに誘われて以来、度々ここへ通うようになった。だが当初の私は無形民俗ばかりに興味を持っていて、有形民俗、つまり民具に対する関心・知識は微々たるものであった。そんな状態で仕事が出来たのだろうかと不安に感じていたが、これも勉強だと思つて取り掛かった。するとどうだろう、たちまち民具という世界の奥行きに惹かれ引き寄せられて

いった。

私が惹かれる植田家の民具の魅力、それはその膨大な数である。学術的に希少であるとか珍品であるとかといった難しい話ではない。過去に使用された当たり前の道具が複数残存していることで、植田家の生活水準や家の考え方、暮らしぶりなどが一手に理解できる。それが植田家の民具の魅力である。そして数ある民具の中で異様に点数の多いモノや、逆に他のモノと関連付け難く浮いてしまうようなモノなどは、植田家における存在理由について考察することで新たな発見が生み出されるのである。

一般的な博物館の展示室に陳列された民具とその説明を見ても具体的な生活の情景は思いつかばない。だが植田家の民具は多数残存することで時間的にも空間的にも過去の生活を映し出す構成要素として、暮らしの風景を想像可能にしているのである。私はこの仕事を通して、民具が生活を知る上で貴重な文化遺産だということを学ぶことが出来た。

私はこうした貴重な体験に感動しているが、苦労が無いわけではない。人生の大半を平成の時代に送っている私にとって、昭和以前の民具のほとんどが未知の道具であった。たとえば着物の洗い張りに使用する伸子針。かつては誰もが所持していた道具も、個人で

着物を手入れする文化が廃れた今日では、若者が見知る機会は無と云つてよい。初めて手にした時は例に違わず私も首を傾げてしまった。ひと昔前の道具でさえ分からないものが多く、何度も事典を引いたり旧植田家のみなさんに助けを求めたりした。

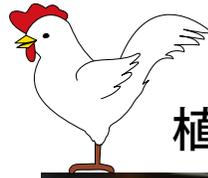
しかし苦労は同時に自身の豊かな財産となる。私は今夏、出身地の静岡県富士市で予定していた。採用試験の面接では、旧植田家住宅で学んだことが私の糧となったのは言うまでもない。

土蔵の宝の山の中で学んだことは本当に大きい。学生の間ではなかなか触れることが出来ない、生活の中の文化遺産を肌で感じたこの経験は無二のものだ。これを自身の次のステージで活かし文化の本質を人々に伝え感じさせられるようになりたい。それが、私を受け入れてくれた旧植田家住宅の関係者方への感謝の意となるだろう。



関西大学文学研究科

秋山 裕貴



旧植田家住宅では、一〇月から毎月一度、「植松のまちづくりを考える会」をはじめ植松とその周辺地域にお住まいの方に、昔の暮らしやまちの様子などについて聞き取り調査を行なっています。

植松は、昭和三五年（一九六〇）頃には現在の約三倍以上の数のお店があり、賑わいがあったそうです。そのころ、どこにどのようなお店があったのか？当時の航空写真を大きく引き伸ばし、その上にみなさんの記憶をたどってどんどん記入していきます。当時は、市場などがあり、生鮮食品店など日常生活に必要なお店が多いのですが、洋服屋さん・

呉服屋さんなどのファッション関係のお店や美容院・散髪屋さんも多く、駄菓子屋さんや模型店など趣味のお店もあり、歩いているだけでも、とても楽しいまちだったようです。

また、昔の写真をみなさんに持ち寄っていただき、当時の暮らしの様子をいろいろとお話していただきました。ここで、その一部を紹介いたします。

- ・JR八尾駅は今とほとんど変わっていないが、昔は汽車が走っていた。
- ・渋川踏切りの場所が今とは違っていた。
- ・渋川神社の境内の中に滑り台やシーソーがあつて子どもがたくさん遊んでいた。
- ・子どもも下駄を履いていた。
- ・川で魚やザリガニをとって遊んだ。
- ・地域一斉に各家族がみんなで大掃除をした。
- ・ふとん太鼓は引かず担いでいた。
- ・テレビでまんがを見るために、子どもたちは風呂屋さんで夕方集まってきた。
- ・etc

まだまだたくさん、いろいろなお話をお聞きすることができました。昔の話は、たくさんの人と一緒に話すと、忘れていたことまで思い出せるようで、「そやったなー!」「いやいやちゃううで!」と話されるみなさんの笑顔

がとても印象的でした。現在の暮らしとはかなり違うところ、今も残っているもの、様々な植松をみなさんと楽しむことができました。

これら聞き取った地域の昔を、次世代に伝承すべく、NPO法人HICALIでは、「植松すこし昔のくらしまっぷ」(うえまっぷ)として現在まとめる作業をしております。今回の紙面ではお伝えできないなつかしい植松を、昔の写真やイラストも交えみなさんにお伝えしたいと考えております。お楽しみに!

寄せられた写真の一部を紹介



昔の八尾駅前商店街



公設市場の様子

# なにわの伝統野菜 栽培日記

## 【田辺大根フェスタ】

急に寒さが厳しくなつた十二月の中旬、大阪市内の商店街で毎年恒例の「田辺大根フェスタ」が開催された。

このフェスタでは、「なにわの伝統野菜」のひとつである田辺大根の「大根らしさ」を競うコンテストがあり、スタッフが育てた大根も、昨年に引き続き、二度目の出陳となった。

発表を心待ちにする我が子



出陳された大根(ライバル)たち

昨年は夏の猛暑のせい、例年より大根の成長が早く、特にプランターで栽培したものは丸まる、パンパンに育ち、今にも破裂しそうなほど大きくなった。畑で育てたものは、プランターに比べると若干小さめながら、理想的な形のもので収穫できた。

前年「葉ぶりがいいde賞」を頂いた植田家の大根。今回も賞を頂くべく苗が小さいうちから様ざまな工夫を試みた。その甲斐あつてか、畑部門では残念ながらもう一歩及ばずだったものの、プランター部門では、その丸まるとした立派な姿で「でっかいde賞」を頂くことができた。

次こそは最高賞「これぞ田辺大根de賞」を頂けるよう、また改めて気合いが入るスタッフたちであります。



「でっかいde賞」を受賞!!

(副賞はトースター)

## 【無農薬と害虫対策】

基本、畑に植えている野菜には農薬は使用しないが、害虫の種類によっては最低限の薬剤を散布しなければならぬ事もある。しかし、今回の大根栽培に関しては、無農薬にこだわつてみた。アブラナ科の植物の天敵「アオムシ」を、毎日一枚一枚葉っぱをめくり、指でつまんで駆除する。これが毎日の日課になった。

虫が苦手な担当のスタッフも「もう慣れました」と苦笑。多い日には三〇匹以上を退治したが、また次の日にはウニヨウニヨ…。寒さが増した十二月後半まで、この作業が続いた。

また、アブラムシ対策に「キラキラテープ」なる銀色のテープを畑のいたる所に設置した。このテープに陽が当たってキラキラ光ること、天敵と勘違いしたアブラムシを防除できるそう。テープの効果か、今回は全くアブラムシはつかず、一切農薬を使わず無事収穫することができた。



# 植松のまち・ひと

第三回

人をつなぐ街〜JR八尾駅前商店街〜

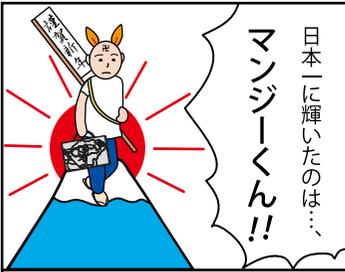
JR八尾駅南口を出ると、そこは昔ながらの商店街。といっても現在は、昔に比べて商店の数も減り、すこし寂れた印象。

商店街では、この場所を盛り上げようと「昔あそび」の開催や駅前花壇の整備、地元祭りの参加など、さまざまな事に取り組んでいる。前号で紹介した「うえまつぶ2」の作成も、地域の人たちとの交流から生まれたアイデアのひとつ。地域の連携を通じて、日々、活性化をめざしている。

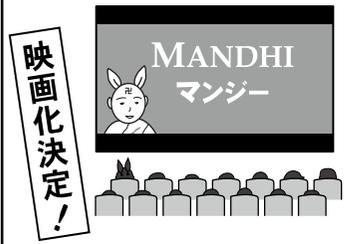
ところで最近、商店街に新しい風が吹いた。なんと新規店舗が参入。旧植田家住宅から徒歩三十秒の場所に在る「みやげもの屋 キャラメルママ」を早速訪ねてみた。

## マンジークン

安富士 暁



日本一に輝いたのは…、  
マンジークン!!



映画化決定!



…という夢を見た。

春から縁起がいい。

元日



数日間、同じ夢を見続けている。

またか…。

8日後…

### 「小さなお店から

### 大きな野望をもって」

当館スタッフの間でもすでに話題のお店「キャラメルママ」。かわいい看板と数々の雑貨が出迎えてくれる。このお店と場所について、店主のもりかわさんにお話を伺った。

「『八尾つてええとこ』つてみんなに伝えたい」との想いを語るもりかわさん。店内には、八尾の作家さんたちの作品が「ギャラリー」のように並べられている。そんなもりかわさんの野望は「地元が活気づいてほしい」こと。「こどもからお年寄りまで、みんな元気になってもらいたい」という。「小さなお店から大きな野望をもって」という心強い言葉が、商店街の明るい未来の到来を予感させる。



もりかわひろこさん



おいしいお茶は心を豊かにしてくれます。

暮らしのお茶からギフトまで…



0120-19-1184



店主のおすすめ

深蒸し煎茶 芳水 100g/200g  
深蒸し煎茶 清緑 200g  
おいしいティーバック 5g×18パック

おいしいお茶は専門店

龍華茶舗

〒581-0083 八尾市永畑町2丁目1-1 Tel.072-993-5673/Fax.072-923-5828

# 落穂拾い

## — 今東光の董風 — (一)

文・伊東健

現在、NHKで放映中の「朝の連続テレビ小説 てっぺん」は、主人公・村上あかりが故郷・尾道市のある島と大阪を往復して、成長していく物語です。番組のナレーションは中村玉緒さん。

今から五一年前の昭和三五年（一九六〇）、河内と因島を結びつけた主人公が誕生しています。「悪名」の朝吉がその人です。この主人公の破天荒ではあるけれども、人情味豊かで、義侠心にあふれた行動に多くの人がびとが魅了され、翌年には映画化。朝吉を演じた勝新太郎に婚約の一札をせまるしつかりもののお絹を好演し、公私ともに生涯にわたるパートナーとなったのが中村玉緒さんだと思えば、連続テレビ小説の設定も魅力倍増です。

この「悪名」の朝吉は、原作では氏が判然としませんが、映画化されるにあたり村上朝吉と明確になります。平成の市町村大合併により因島は、現在では尾道市になっています。

尾道周辺の島々で村上姓が多いのは周知の事実ですが（瀬戸内海の村上水軍の影響？）、このあたりのつながりも興味深いものです。

実は、昨年大人気番組であった同じく「朝の連続テレビ小説 ゲゲゲの女房」でも、私にとって興味深い描写がありました。主人公である布美枝さんの嫁ぎ先が調布市で、昭和二〇年から三〇年代の風景が時折、セットや白黒画面で映し出されていました。

「悪名」の原作者・今東光は、「悪名」連載開始の一五年前には、調布に疎開していて、終戦直後の昭和二十一年に蜂谷きよと結婚、「ゲゲゲの女房」よりもさらに厳しい生活を始めているのです。

何気なく見ているテレビや映画、絵画や読んでいる本から薰ってくる今東光の痕跡を、落穂拾いのように紹介します。



「りんごの木」では、障害をもつ人たちが  
ひとつひとつ丁寧に縫製品や  
手織り品をつくり働いています。

# りんごの木

HOT CRAFT SHOP

社会福祉法人 信貴福祉会  
りんごの木

〒581-0868  
大阪府八尾市西山本町4-15-2  
作業所: TEL/FAX (072) 993-4330  
ショップ: TEL (072) 997-1440  
営業時間: AM 10:00~PM 6:00  
定休日: 日曜日(臨時休業あり)



## これからの展示・企画ご案内

### -展示-

◎2月2日(水)～3月28日(月)  
「家相図・屋敷図でみる  
旧植田家住宅の歴史」

◎4月1日(金)～5月30日(月)  
企画展「金属のうつわ」

展示、イベント等のお知らせは  
ホームページもご覧ください  
<http://kyu-uedakejutaku.jp/>

### -企画-

◎2月20日(日) 14:30～  
「朗読の会」主催:八尾市文化振興事業団  
読み手:石井麗子さん(文学座俳優)

◎3月6日(日) 14:00～  
講座「伝統民家のあれこれ」  
講師:平谷宗隆(一級建築士・伝統民家研究家)

◎4月24日(日) 14:00～  
展示関連講座「錫器(すずき)～その歴史と技法～」  
講師:宮元正博(当施設学芸員)

※毎月第3日曜日は「むかし遊びの日」を開催

(詳しくはお問い合わせください)

### 2・3・4月の休館日のご案内 ※○印が休館日

#### 2 February

日	月	火	水	木	金	土
		○1	2	3	4	5
6	7	○8	9	10	11	12
13	○14	○15	16	17	18	19
20	21	○22	23	24	25	26
27	28					

#### 3 March

日	月	火	水	木	金	土
		○1	2	3	4	5
6	7	○8	9	10	11	12
13	14	○15	16	17	18	19
20	21	○22	○23	24	25	26
27	28	○29	○30	○31		

#### 4 April

日	月	火	水	木	金	土
					1	2
3	4	○5	6	7	8	9
10	11	○12	13	14	15	16
17	18	○19	20	21	22	23
24	25	○26	27	28	29	30

安中新田会所跡旧植田家住宅へは公共の交通機関をご利用ください

※当施設に駐車場はございません

- JR 大和路線八尾駅下車  
南出口より東へ徒歩3分
- 近鉄大阪線八尾駅から  
近鉄バス藤井寺駅前行  
JR 八尾駅前バス停下車  
南東へ徒歩6分
- 八尾市植松町 1-1-25
- 072-992-5311
- <http://kyu-uedakejutaku.jp>



開館時間: 午前9時～午後5時  
(入館は午後4時30分迄)



JR八尾店は、旧植田家住宅  
より西へ約20M。ご利用を  
お待ちしております。

桃 林 堂

もなか  
常盤香  
大坂  
土

- ◎ 本社・陌草園(山本南) Tel-072-923-0003
- ◎ JR八尾店(澁川神社北) Tel-072-992-4649
- ◎ 西武店(八尾西武・地下1階) Tel-072-997-2650
- ◎ 東京・上野店(東京芸大前) Tel-03-3828-9826
- ◎ 東京・青山店(表参道) Tel-03-3400-8703

<http://www.tourindou100.jp>



本社・陌草園(山本南)

# “エコ綴じ印刷ってなあに？” (のり綴じ印刷) 『CSRにもつながる“エコ綴じ印刷”』



エコ綴じ印刷とは、印刷の過程で糊を使用して綴じる新しい製本方法です。従来の針金で綴じる製本方法では、指をケガしたり、こどもが間違っ  
て飲んでしまったりといった危険性があり、安全・衛生に細心の注意が必要な場合や、異物混入のリスクを避けたいシーンでの使用は好ましくありません。  
(例：こども向け商品の説明書、食品関係の資料、製薬工場で使用するマニュアル等)

しかし、このエコ綴じ印刷ならそのような危険性もなく、安全です。そして、エコ綴じ印刷で作成した冊子なら、捨てるときに従来のような紙と針金を分別する作業はなく、そのまま資源ゴミとして捨てることのできるの  
で、リサイクルしやすいのが特徴です。

近年、地球温暖化や大気汚染などといった環境問題への意識が高まる中、エコ活動への取り組みは企業の社会的責任でもあります。

印刷の過程で針金ではなく、糊で綴じるエコ綴じ印刷はCSRへの貢献はもちろん、エコに取り組む姿勢のアピールにもなり、さらなるイメージアップにつながります。



株式会社シーズクリエイトは、時代に先駆けて小さな工夫を重ねながら、資源を大切に、環境に配慮した技術と印刷物の開発をこれからも続けていきたいと思っています。

※CSR(Corporate Social Responsibility): 企業の社会的責任



安中新田会所跡日植田家住宅だより 発行・編集 / NPO 法人 HICALL (安中新田会所跡日植田家住宅指定管理者)  
〒581-0084 大阪府八尾市植松町 1-1-25 TEL.072-992-5311  
ホームページ <http://kyu-uedakejutaku.jp> メールアドレス [info@kyu-uedakejutaku.jp](mailto:info@kyu-uedakejutaku.jp)  
●本誌記載の記事・写真・イラスト等の無断複製、転載を禁じます。